

『三教指帰』(儒・道・仏の教えがおもむくところを示す) 巻の上 併せて序

文章が起こるには必ずわけがある。

天は晴れると気象をあらわし、人は感じると筆を執る。『八卦(はっけ)』の伏羲(ふっき)、『道德経』の老子、『詩経』の孔子、『楚辞(そじ)』の屈原(くつげん)も心に感じたから紙に書いたのである。

凡人と聖人とは生まれを異にし、昔と今とは時代を異にするというが、人が憤りを写(は。吐)くのはどうして経歴をいわないでよからうか。

われは十五のとき、母の兄で従五位下の学者阿刀氏に師事し、教えを守り、学徳を仰ぎ求めた。

十八のとき、大学に遊学した。

螢の光や雪の明かりで学んだ車胤(しゃいん)や孫康(そんこう)のように怠惰に打ち勝ち、縄を首にかけたり錐(きり)で股を突いたりして眠気を覚ました孫敬(そんけい)や蘇秦(そしん)のように勤め励まないのを怒った。

ここに、一人の沙門(しゃもん。僧)がいた。われに『虚空藏求聞持法』を示し、その経を説いたのである。「もし人が法によってこの真言を百万遍となえれば、ただちに一切の教えの意味を暗記することができる」と。

そこで、大聖人仏陀の誠言を信じて木の棒で火を熾(おこ)すような苦行を望んだのである。

阿波の国は大滝の岳に登り、土佐の国は室戸の崎で励み唱えた。

谷はこだまを惜しむことなく、明星は輝いてわれを迎え、遂には、「名を争うものは朝廷においてなし、利を争うものは市場においてなす」といった栄華を瞬時に厭(いと)いしりぞけ、山野の暮らしを朝夕ねがうようになったのである。

軽くて暖かい狐の毛皮を着た人や肥えて美しい馬に乗った人をみては稲光のようにはないのちを嘆き、体の不自由な人やボロを着た人をみては因果応報を悲しむ思いが休みなくわきあがって来、目に触れるものがわれを仏へと勧めたのである。

誰が風をつなぎ止めることができるのか。

ここに数人の親しい知り合いがいて、われを五常（仁・義・礼・智・信）の縄で縛り、われを断念さすのに忠孝に背くというのである。

われは思うのである。物の心は一つではない。鳥や魚も心は違う。そのため、天子は人を駆り立てるのに三種の教えの綱をつかう。言うところの、釈迦と老子と孔子である。

教義に深い浅いはあるが、いずれもみな聖人の説である。もしどれか一つの綱に入るのであれば、どうして忠孝にそむくといえようか。

同じくまた、一人の従兄（いとこ）がいた。性根はひねくれ、狩猟ばかりか、酒と女を昼夜の楽しみとし、賭博遊侠を日常茶飯とする。その習性を顧みてみると、教化指導に感化された結果だったのである。

こうして、あれとこれ二つの事が日ごとにわれを奮い立たせるので、亀毛（き・もう）を招いて儒学の客とし、兎角（と・かく）を求めて主人とし、虚亡士（きよぼう・し）を迎えて道教の考えを述べてもらい、仮名児には腰をまげて出家の志を示していただき、そろって論議を連れ、ともに蛭公（しつこう）を戒めた。

録して三巻、名付けて「三教指帰」という。

ただ憤懣（ふんまん）の高ぶった気持ちを吐いただけである。よそ様へのお披露目は望んでいない。

時に延暦十六年十二月一日

亀毛先生はうまれつき弁舌がさわやかで、姿かたちも大きく立派であった。

中国のあらゆる古典に習熟し、太古の帝王や八卦についても多くを暗記していた。

口を少し開けば枯れ木に花が咲き、一言わずかにしゃべれば骸骨も肉をつけるといった調子で、弁舌で有名な蘇秦や晏平（あん・ぺい）も彼と向かい合えば舌を巻き、張儀（ちようぎ）や郭象（かく・しょう）も遠くから見ただけで声を吞むほどの雄弁家だった。

この日、亀毛先生は休みだったので、兎角（と・かく）の館に行った。

主人の兎角は庭に筵（むしろ）を敷いて席をつくり、料理をすすめて杯をかわし、たてつけ三杯の杯も終わると、膝を近づけて談話した。

兎角の妻の姉妹の子に蛭牙（しつが）公子というのがいた。

性質はひねくれて欲深く、教えさとしても虎のように暴悪で、礼儀につながれず、賭博狩猟を生業とし、遊侠にして無頼（ぶらい）、奢（おご）り高ぶりに至ってはまた余裕があった。

因果を信ぜず、罪福を承知しない。酔うほど飲んで、食い飽きるほど食らう。女色を好んで寢屋にこもり、親が病氣になってもいまだかつて心配したことがない。他人に対しても心から敬わず、父や兄をなれなれしく侮（あなど）り、学徳のすぐれた老人をばかにしていた。

兎角は亀毛先生に語っていった。

「聞くところによりますと、王豹（おう・ひょう）は歌をうたつて高唐（こうとう。山東省）の人を変え、縦之（しょうし）は春秋を説いて蜀（しよく。四川省）の人を教化し、橘（たちばな）や柚（ゆず）も北の畝（うね）に植えれば自然と食えない枳（からたち）となり、曲った蓬（よもぎ）も麻にまざれば自ら真っ直ぐになるといふことですが、どうか先生、お知恵の倉を開いてお話しいただき、蛭牙（しつが）の頑（かたく）な心を諭（さと）し教え、ありがたいお言葉で愚かな心を教え悟らせていただけないでしょうか」と。

先生はいった。

「わたしは聞いたことがある。知恵のすぐれた上智は教えなくとも道を知り、救いようない愚かな下愚は教えても道がわからない、と。むかしの聖人たちでさえが手をつけられ

ずに悩んだのです。まして今のわたくしごときがどうして愚者を変えることができませんうか」

兎角はいった。

「そもそも物は心によって形づくられるというのが先賢の論であり、時に応じてことばを述べるというのは古くから貴いとされています。だから、韋昭（い・しょう）は賭博を非難した一篇を書き、元叔（げん・しゅく）は邪を憎む詩をつくり、ともに代々戒めのお手本として読みつがれています。また、鈍刀が骨を切れるのは砥（と）石の助けがあるからで、重い車が軽く走れるのは油の助けがあるからです。このように無情の鉄木（てつぼく）でさえがすでに助けられていますのに、有情の人類がどうして助けられないのでしょうか。どうか先生、蛭牙の愚かな心を洗い清め、かれの迷いに指針を示し、無知にお灸（きゅう）をすえ、正しい道に立ち返らせてください。どうして立派にならないことがありますうか。また、どうして喜ばないことがありますうか」と。

亀毛先生は困ってため息をつき、天を仰いだり地を眺めたりして考え込んでいたが、やがて思い直して深く息をすると、自信のなさを吹き飛ばすかのように大笑いしていった。

「何度も懇請（こん・せい）されたのではお断りするわけにもいきますまい。今はただお引き受けて微力ながらわたくしの今日までの学問知識を出し尽くし、いかにすれば心が養えるかをお教えることにいたしましょう。ただし、郭象（かく・しょう）のような弁舌もなく、鄭玄（じょう・げん）のような学問もない。また陳琳（ちん・りん）のような文章も書けず、魯仲連（ろ・ちゅうれん）のような言葉も持たない。彼らのような名言名文をご披露しようとすれば、言いよどんで言葉にならず、黙ってやめようとすれば、心は落ち着かない。そういうわけで、気持ちを抑えることができず、わずかばかりの知識であらましを述べることに努めます。なにとぞ、物事の一角を示すだけでその他を叩くものでないことをお断りしておきます。

そうですね、わたしは思うのです。混沌（こん・とん）が清濁（せい・たく）に分かれて人類は始まり、清濁ともに天地をいただいて、同じく五体を備えたのだ、と。ですから、知者は三千年に一度咲く優曇華（う・どんげ）のように少なく、愚者は太陽と競って渴き死んだ夸父（こ・ほ）の鄧林（とう・りん）の木のように多いのです。したがって、善を望むものは麒麟の角を見つけるようにまれであり、悪を楽しむ輩は竜の鱗（うろこ）のように鬱蒼（うつ・そう）としているのです。人の行ないは星のように一律であるが心は顔のように異なり、玉石は用途を異にして八十一種類に分けられ、賢愚は区別して碑文を解いた楊脩（よう・しゅう）と魏の武帝のように三十里の差があるのです。それぞれが好きなどころにつけば石を水に投げ入れたようになじみ、いずれも嫌いなところにつけば油を水に入

れたようになじまない。これは干物屋の臭気が干物を取り去っても抜けきれず、麻畑に植えた蓬（よもぎ）が真っ直ぐに育つ兆しをみせないのと同じです。ついには頭の虱（しらみ）とともに心を黒く養い、長生きを願って棗（なつめ）を食らう晋（しん）人の齒のようにも黄色く染まってしまうだろう。表は虎の毛皮のようであつても、心は錦に包まれた糞です。これでは畜生のそしりを生涯招き、愚者の名を万代にわたって伝えるだろう。どうして恥ずかしくないことがあるか、どうして悲しくないことがあるか。

わたしは思うのです。和氏（か・し）の玉が光り輝いたのは研磨（けんま）したからであり、蜀（しよく）の錦が色鮮やかなのは清流にすすぐからです。盗賊の戴淵（たいえん）は心を入れ替えて將軍となり、惡餓鬼の周処（しゅう・しょ）は心を改めて忠孝の名誉を得ました。玉は磨くことで車を照らす器となり、人は努力して学問を究める能力を持つのです。教えにしたがつて円満になれば、凡夫の子でも宰相になれるだろう。教えに逆らつて角（かど）立てば、皇帝の子でも凡夫になるだろう。

木は縄によつて真っ直ぐになるということは、すでに昔に聞いて知つていよう。人は人の諫（かん）言を聞き入れて賢くなるのです。どうし蛭牙（しつが）に無駄であらうか。上は天子、下は凡童に至るまで学ばずに悟り、教えにそむいて悟つた者はいないのです。夏（か）や殷（いん）が滅亡して周や漢が興隆したのは、前の車がひっくり返つたのを後の車が教訓としたからです。戒（いまし）めないでよからうか、慎まないでよからうか。

蛭牙よ、是非とも耳を聞き分けのよい怜倫（れい・りん）に借り、目を百歩先の毛先が見える離朱（り・しゅ）に借り、つつしんでわたしの教えを聞き、そなたが迷い込んでいる道を見るがよい。

そもそもそなたがしていることは、上は父母を侮（あなど）つて朝夕の挨拶をせず、下は万民をバカにして痛み憐れむ慈しみを持たない。あるいは狩獵を生業として野山を走り回り、あるいは漁獵を仕事として海原に漕ぎ出し、終日波と戯れている。あるいはまた、夜もすがら賭博に耽（ふけ）つている有り様は、戦を好み兄を殺した州吁（しゅう・う）や碁に熱中して母を弔わなかった嗣宗（し・そう）以上である。善言や箴（しん）言から遠く離れ、寢食を一切忘れ、模範となる行ないをすべて消し去り、溪谷が洪水を飲み込むように、貪婪（どん・らん）な欲望を盛んに競っているのである。けものを食らい、さかなを食らうことにかけては虎や鯨にまさる。いまだかつて肉親への思いがないのだから、どうしてそれらを顧みることがあろうか。酒を飲み、酔つ払つた姿は喉の渴いた猿も恥じをいだき、走り回つて美食を漁る姿は飢えた蛭（ひる）の比ではない。まるで蟬のようであり、蜩（ひぐらし）のようである。草の葉先にしたたる露ほどの酒も飲まないといった戒めは守らず、朝となく夜となくである。

たれか一日一食の責めを致さないか。蓬髪（ほうはつ）の下女やめかけを見て欲情を起こすさまは、醜女に五人もの子を孕ませた登徒子（とうとし）の比ではない。まして、艷色の美女であつてみればなおさらであろう。王女に恋焦れて死んだ術婆伽（じつばか）のような純情さなど全くないのである。さかりのついた春の馬や夏の犬のように欲情に煽られているのである。どうして老いた牝猿や毒蛇の話を思い描いて欲情を断ち切らないか。遊女屋に上がつてどんちゃん騒ぎを楽しんでいるかっこうは大猿が梢で戯れているようであり、授業中にあくびをしているさまは兎が草むらで眠っているようなものだ。眠気を醒ますのに首に縄をかけた孫敬や股に錐（きり）を刺した蘇秦のような努力がまるでないのである。右手に杯、左手に蟹の爪を持つて酒船の中で一生を終わりたいといった畢茂成（ひつもしせい）のような思いを胸に抱いているのである。螢の光を袋に集めて学んだ車胤（しやいん）のように励まず、百錢を杖の頭に懸けて酒屋に入り浸つた阮脩（げんしゅう）のようになりたいたいと思つているのである。このような輩がたまたま寺に入つて仏を見たとしても、罪を懺悔（ざんげ）することなくかえつて邪心を起こすだろう。

いまだに知らないのである。南無仏（なむほとけ）と一度となえるだけで遂には悟ることができ、一錢の献灯でも菩薩の座にすわり、終には如来（によらい）の座に登ることができるといった「貧者の一灯」を。

学校で教えを受けながら自分の悪を除かず、かえつて先生の教えを恨む。どうして思はないのか、丁寧（ていねい）に教えようとすることが兄弟の子よりも深く、懇切（こんせつ）に導こうとする思いが姉妹の子よりも厚いということを。

好んで人の短所を論（あげつら）い、崔子玉（さいしぎよく）の『十韻の銘（一、人の短所をいわない。二、自分の長所を話さない。三、人にほどこして奢（おご）らない。四、施しを受ければ忘れない。五、世間の評判は願わず、仁を根本とし、本心に秘めてのち行動すれば悪口に傷つくことはない。評判は実際以上であつてはならない。六、愚を守ることには聖人が卑しめるところである。七、黒と交わつても黒に染まらないのを貴ぶ。八、曖曖（あいあい）として目立たず、内に光を含む。九、柔弱を生来の友とする。老子は剛強を戒めており、行つては止まり行つては止まりして進みかねている男の志は非常に計り難いものである。十、言葉をつつしみ、飲食を節約し、足るを知れば不幸に勝ち、行いが尋常であれば長々と自からよい評判をたてる』を顧みず、しばしば多言に精をだして孔子の三つの封じ事である『三緘（さんかん。一、多言するな、多言はしくじりが多い。二、多事に関わるな、多事は患いが多い。三、安樂にして必ず戒め、悔いるところを行なうな』を鑑（かがみ）としない。明らかに中傷（ちゅうしゅう。悪口）が肉親と財貨を滅ぼすことを知つて、言行が名誉と恥辱を生じさせることをつつしまない。

この種の生き物は実に多く繁殖し、仲間も多い。山川草木禽獸（きんじゅう。とりとけ

だもの）に命名したといわれる聖王禹（う）はどうして書き漏らしたのか、黄帝の臣下である隸首（れい・しゅ）は算術に得意であったのになぜ数えなかったのか。

うまいものを鱮腹（たらふく）食っていたずらに百年を送るのは鳥や獣と同じである。暖かい錦を着て空しく四季を過ごすのは犬や豚と同じである。『礼記』に言っている。『父母が病気のときは、成人は髪を梳（す）かず、立ち居振舞いは静かにして琴を弾いたり、酒に酔ったり、齒茎を出して笑ったりしない』と。

これは、親を思い遣つてあえて華美に走らないということである。

また、いつている。『隣に葬式があるときは歌をうたいながら杵（きね）をつかない。村に通夜があるときは巷で歌をうたわない』と。

これもまた、他人と憂いを共にして親近者も他人も分け隔てしないことをいつているのである。

他人を思い遣ることににおいてもこうであるのだから、親近者においてもこうでなければならぬのである。だから、親族が病気のときは医者を迎え、薬を毒味する心がけがなければ世の賢人識者は目をそむけ、恥ずかしさのあまり冷や汗を流すだろう。

村里に葬式があるときは共に嘆き悲しんで訪ねるもので、慰める心がなければ参列者や有識者は寒々とした気持で恥ずかしさのあまり穴に入るだろう。形（かたち）は禽獸（きんじゅう）と違うのに、どうして心は木石（ぼく・せき）と同じなのか。体は人類と同じなのに、どうして鸚鵡（おうむ）や猿に似たのか。

蛭牙よ、もしそなたが悪を弄（もてあそ）ぶ心を変えて孝徳に専念すれば、三年間、血の涙を流して父の死を悼んだ高紫（こう・し）や、母を埋めるのに耐えられずわが子を埋めようとした郭巨（かく・きょ）や、母を勞（いた）わって冬に竹の子を得た孟宗や、裸になり川の氷を溶かして魚を得た休徵（きゅう・ちよう）や、母を木像にして敬った丁蘭（ちようらん）らを抜いて至孝の誉れを世間に広めるだろう。

忠義でいえば、主君を諫（いさめ）めて欄檻（らん・かん）を折った朱雲、琴を投げて窓をこわした師経、胸を割かれた比干（ひ・かん）、忠臣懿公（い・こう）の肝と入れ替えた弘演（こう・えん）を越えて直言（ちよく・げん）の誉れを後世に流すだろう。

経書を講義すれば、東海の子良や西河（せい・か）の子夏も舌をまいて辞めてしまうだろう。

歴史書を読めば、楚の屈原（くつげん）や蜀の楊雄（ようゆう）も口をとじて敬礼するだろう。

書を好めば、鳳凰（ほうおう）が飛び虎が伏す奔放雄渾（ほんぼうゆうこん）な字は、鍾繇（しょうよう）・張芝（ちようし）、王羲之（おうぎし）・歐陽詢（おうようじゆん）といった書聖も筆を投げて恥じ入るだろう。

弓を習えば、鳥を落とし猿を鳴かせる術は十個の太陽のうち九つを射落とした羿（げい）や構えただけで白猿を泣かせた養由基（ようゆうき）、弦の音だけで雁を落とした吏嬴（りゑい）や弋（よく）糸をつけた矢）で二羽の雁を一度に落とした蒲旦子（ぼたんし）といった名人も弓の弦を断ち切つてため息をつくだろう。

戦地へ行けば、兵法家の張良や孫子も黄石（こうせき）の兵書が役に立たないのを嘆くだろう。

農耕につけば、財を築いた陶朱（とうしゆ）や陶朱の教えを受けて富を成した倚頓（いとん）も穀物の貯えのないのを悲しむだろう。

政治の世界に入れば、四知（しち）天知る・地知る・神知る・われ知るの楊震をまたぎ越して誉れを馳せるだろう。

裁判官になれば、正しい裁判をして三回も罷免された展季（てんき）柳下惠）を超えて美名を飛ばすだろう。

清く慎み深ければ、機（はた）を断ち切つて子を戒めた孟子（もうし）の母や武安山に隠れ住んだ孝威（こうせき）の類だろう。

清廉潔白ならば、首陽山にこもつて飢え死にした伯夷（はくい）や、帝位から逃げた許由（きよゆう）の仲間だろう。

医学を志し技能に心を向ければ、心臓を取り換え胃を洗浄する腕前は扁鵲（へんじやく）や華佗（かた）を越えてすぐれた能力を発揮し、鼻の先についた石灰を大斧（おおおの）で消した匠石（しょうせき）や雲梯（うんてい）ハシゴ車）を作った公輸般（こうゆはん）を凌（しの）いで異名を世に走らせるだろう。

もしこのようであれば、度量は広々とした万頃（ばんけい）の池にたとえられた叔度（しゆくど）と同じくし、徳は高々とした千丈（じよう）の山にたとえられた屢嵩（ゆすう）に比べられ、見る者はその深い浅いを計ることができず、仰ぐ者はその高い低いを測るこ



とができないだろう。

こうなるためには論語里仁（り・じん）篇がいうように、是非とも郷（さと）のよいところをえらんで家とし、土（くに）のよいところをえらんで屋（おく）とし、道をにぎって寢床とし、徳を提（さ）げて布団（ふとん）とし、仁を席にして座り、義を枕にして臥し、礼をかけ布団にして眠り、信を衣服にして歩くべきである。一日一日をつつしみ、一時一時を競い、怠らずに励み、心をこめて汲み取るのである。書物・書籍は周公（しゅうこう）のように来客があつても離さず、紙・筆墨（ひつ・ぼく）は左思（さし）のように転んでも離さないことである。

こうして学んだ暁には、宴会の論難（ろんなん）で五鹿（ごろく）の角を庄（へ）し折った朱雲や、諸先生を言い負かして五十枚の筵（むしろ）を重ねて座った戴憑（たいひょう）のような論客になるだろう。弁論の泉は尽きることなく蒼海とともに湧き上がり、筆はますます盛んになって樹林とともに繁榮するだろう。詩文は玉のような響きで孫綽（そんしゃく）や司馬相如（しばそうじよ）をしのいで珠玉に連ねられ、黄金のように響く文章は楊雄（ようゆう）や班固（はんこ）を越えて花に貫かれるだろう。短時間で離騷（りそう）伝を書きあげた劉安（りゅうあん）のように、また、すらすらと鸚鵡（おうむ）の詩を作って直す字句のなかった禰衡（でいこう）のように詩文の苑（その）に遊んで創作の原に羽をやすめるだろう。そうなれば、鳳凰（ほうおう）の飾りをつけた貴族の車が門前に続き、璨々（さんさん）と光り輝く贈り物の玉帛（ぎよくはく）（絹）は庭の中に店を連ねるだろう。魏の文帝があればら屋に敬礼した段干木（だんかんぼく）のような徳を得れば、どうして寧戚（ねいせき）のように牛の角を叩いて仕官を求める必要があるか。周の西伯に迎えられた太公望（たいこうぼう）のような聖人となるのである。どうして馮援（ふうけん）のように太刀の柄（え）を弾いてまで召される必要があるか。偶然の幸いを待つまでもなく宰相の地位に登り、自分で自分を売り込まなくても大臣宰相の地位に連なるのである。まして高位高官のごときは塵芥（ちりあくた）を拾うよりもたやすく、一瞬にしてなれるのである。大臣宰相の印綬を授かる努力は踵（きびす。かかと）を返すほどの時間ですむのである。

ここで、父母への孝行を主君への忠義に換えて仕え、誠意をもって僚友と交わることになる。

王祥（おうしょう）のように呉の名刀干将（かんしょう）を腰につけ、象牙の笏（しゃく）を紳（しん。大帯）に挟み、朝廷に起居して天子を仰ぎ、政治の万般（ばんぱん）を評議すれば、評判は四海天下に溢れ、朝廷を出て人民をいたわれば、非難は万民の声に断たれるだろう。名は史書に記され、榮譽は末代に流されるだろう。高位高官が安眠する墓所に祭られ、立派な諡号（しごう。おくりな）が贈られるだろう。どうしてこれが不朽の

盛大な事業でないことがあるか。さらにまた、これに何をつけ加えるか。

この世には日々の行楽があるが、あの世にはともに楽しむ人もいない。天上の牽牛（けんぎゅう）は独身を嘆き、湖水の鴛鴦（えんおう）おしどり）はいつも一緒にいることを歎ぶ。それゆえ、『詩経』は嫁に行き遅れた娘を詠んだ『七梅（しちばい）の嘆き』を載せ、『書経』は太古の帝王堯（ぎょう）が舜に嫁がせた娘二人の婦道（ふどう）が守らなければならない道）を『二女の嬪（ひん）』として残しているのである。

人は女嫌いの柳下惠ではない、たれが連れ合いがなくてよからうか。世間は独身を通して孫登（そんと）とはちがうのである。どうして枕を二つ並べないでよからうか。是非とも、楚の宋玉が『高唐賦』で詠った巫山（ふざん）の美女を求めて姫（き。周王朝の姓）氏を訪ね、美人の家系である姜（きょう。太公望の姓）氏を自分のものにすべきである。

轟々（ごうごう）たる迎えの車は陰々として街にあふれ、轟々（ひようひよう）たる送りの騎馬は大雨のように音立てて城壁に近づく。嫁に従う下女は折り重なるように延々と続き、その袂（たもと）は天を覆って日を影らし、輿（こし）を担ぐ者の汗は小雨のように地に注ぐ。紫の天蓋は空を飛ぶ雲のように翔け、刺繡（ししゅう）の衣服は地を払って風のように舞う。

嫁を迎える儀式が終わり、送りの騎馬を送る儀式も終わる。ご馳走をともし酒をともしにする。二つ割りにした瓢（ひさご）の杯を合わせ、体を合わせる。珠簾（たますだれ）を巻き上げて互に向き合い、黄金の寝台を払って体を並べる。大小の琴の音色を凌（しの）いで声を合わせ、膠漆（こうしつ）にかわとうるし）の離れ難さを越えて契り（ちぎり。誓い・情交）を共にし、偕（とも）に老いて並ばなければ泳がないという東方の鰈（か）れい）を笑い、ともに墓に入るときは並ばなければ飛ばないという南方の鵝（けん）を嘲（あざけ）り、一生の愁いを消して百年の樂しみを快（よろこ）びとするのである。また時には親族縁者を集めてしばしば友人を招き、いろいろな珍味を並べて最上等の酒を酌（く）み交わし、杯を満たして座を巡り、客は樂器を奏でて『詩経』の『われ帰る』を歌えば、主人は車の楔（くさび）を抜いて井戸に投げ捨て、外は露が降りているからと告げ、日を重ねて帰ることを忘れさせ、夜を重ねて舞い踊り、天下の樂しみをほしいままにしてこの世の歡樂を味わい尽くすのである。どうして楽しくないことがあるか。

蛭牙よ、早く愚かな生活を改め、専らわたしの教えを習うがよい。

親に仕える孝行を究めれば、君（くん）に仕える忠義は備わり、友に接する儀礼も行き渡り、子孫繁栄の喜びに満たされるだろう。『身を立て道を行ない、名を後世に揚げ、もつて父母を顕（あらわ）すは孝の終わりなり』と『孝経』にあるが、思うにこのようなもの

ではあるまいか。

孔子はいつている。『耕さんか、飢えはその中にある。学ばんか、禄はその中にある』と。

誠であるぞ、この言葉は。まさに、紳（しん。大帶）に書き付け、骨に刻み付けして肝に銘じられよ」

蛭牙公子は跪（ひざまず）いて、たたえていった。

「はい、よくわかりました。謹んでお言葉を承り、今より以後は心を一筋に先生のいつけを習い奉（たてまつ）ります」と。

そこで、兎角公は席を降りて繰り返し礼をし、「ああよいことだ、よいことだ」と、いった。

「むかし、雀（すずめ）が大水に入って蛤（あわび）になったという話をきき、疑ったことがありましたが、今、蛭牙の変わり具合をみますと、鳩が鷹になったという話も信じないわけにはいきません。葛仙（かつせん）は白米の飯を吐き出してたちまち蜂に変え、その師の左慈（さじ）はあつという間に羊に変身したそうですが、どうしてどうして先生のすぐれたおことばが愚悪を変えて賢良としたことに及びましょうか。酔を求めて酒を得たとか、兎を撃つて鹿を得たとかという話がありまますが、まさしく先生の教えはその通りでございます。『詩経』をきき、『礼記』を聞く客も恐らく今日ほどすぐれた話に行き当たったことはありませんまい。このことをただただ蛭牙の戒めとするだけでなく、わたくしも生涯の教訓として座右に置かせていただきます。まことにありがとうございます」

### 三教指帰 卷の上。

卷の中 虚亡隠士（きよぼういんし）の論

虚亡隠士（きよぼういんし）は先ほどから彼らの座席の側にいて愚者を装い、知恵を隠し、和光同塵（わこうどうじん）といった面持ちでいた。

ぼさぼさの蓬髪（ほうはつ）は登徒子（とうとし）の妻をこえ、ボロの綿入れは仙人の董威（とうせき）以上だった。

足を投げ出し、傲然（ごうぜん）と座っていたが、にっこり笑って唇を広げ、頬をゆる

め、上目使いに「ああ違うんだなあ、貴公らの薬の与え方は」と、いった。

「聞いていると、初めは千金の狐の皮衣（かわごころも）をみているようであり、竜虎と対面しているようでもあったが、今じゃ寸法（すんぽう。長さ）の短い蛇や小鼠を見ているようである。がっかりした。いかがなものか、自分の病気を治さずして人の腫（は）れ物を切り開くのは。貴公が病を治すくらいなら、むしろ治さない方がよい」

亀毛公はひどく驚いて辺りをきよろきよろ見回し、恥じ入りながら進み出て虚亡隠士（きよぼう・いんし）にいった。

「先生、もし、先生に異なった別のお説がございましたら、お願いですからここで一つその教えをお述べいただけませんか。僕（ぼく）は兎角公の仰せに耐えられず軽率にも安易に語ってしまいました、どうかお願いいたします。先生のご見識で春雷を轟（とどろ）かせ、万物を目覚めさせてください」と。

虚亡隠士はいった。

「あの真つ赤な太陽は光り輝いて盛んに明らんでいるが、目のわるい人にはその輝きは見えない。轟々（ごうごう）たるかみなりは轟（とどろ）き響いて猛々しく激しいが、耳のわるい人はその響きを信じない。ましてや、わが道教の開祖黄帝の秘術や言葉は凡人の耳には遥（はる）かに遠いのである。どうして尊王（そのんおう。黄帝）の奥義をむやみに説けようか。

生贄（いけにえ）を殺し、血をすすって誓いを立てたとしても、聞くことは非常にむずかしい。骨にちりばめて誠を示すといっても伝え易いものではない。なんとすれば、多くが短い綱（つな）の釣瓶（つるべ）で井戸水を汲んでは井戸が涸（か）れたと思い、小指で海水を測っては海の底に着いたというような人たちだからである。だから、仮にも、その人が教えるにふさわしい人でなければ、たとえ金銀財宝を山のように積んでも喉の奥にしまい込んで語ってはいけない、と黄帝もいつているのである。実際、その人が器でなければ、薬の調合法といえども箱に入れて地下に隠し、のち、適当な時期に人を選んで伝えよ、と葛洪（かつきょう）も『抱朴子（ほうぼくし）』に書いているのである。そういうわけであるから、貴公らに教えるわけにはいかないのである」と。

そこで、亀毛公らはともに相談していった。

「むかし漢の武帝は不老不死の術を西王母に請い求めた。長房（ちやうぼう）は壺公（ここう）の弟子となって仙術を学び、竹の杖に乗って郷里に帰ってきた。われらは思いがけなくも先生とめぐりあったのです。かつての邠原（へいげん）のように千里の先に師を尋

ねなくとも、八百年を生きた彭祖（ほうそ）のように万年の寿命を生きながらえるかも知れないのです。何と素晴らしく幸せなことではないか。是非ともお願いしようではないかと。

三人は並んで隠士の前に進み、三拝九拝して額を地にすりつけ、「重ね重ねお願いいたします。どうか教えを垂れてくださいませ」と、いった。

「ならば、壇を築かれよ。壇を築いて生贄（いけにえ）の血をすすり誓約を致せば、一つ二つだが教えてやってもよい」と、隠士はいった。

支度はすぐに整った。

三人は隠士の指示を承（うけたまわ）ってことは通り壇に昇り、穴に臨んで誓いを結び、誓約書を読んだ。

約束事が終わり、いよいよ教えを仰いだ。

隠士はいった。

「しかるにである。汝（なんじ）らは慎（つつし）んで聞け。今まさに汝らに授けようとするのは不死の術であり、長生きの術である。かげろうのごとき短い汝らの命を鶴亀とともに競わせ、のろい驢馬（ろば）のような足の汝らを翼のある竜とともに走らせ、日月星の三曜と並んで終始八人の仙人とともに向き合い、朝は渤海の沖にある蓬莱（ほうらい）の銀玉の宮殿をめぐって一日中ゆったりと遊び、暮れては渤海の東にある五岳の金玉の宮殿を回って夜通しのんびりと遊ばせてやろうではないか」

亀毛らは「はい」と答え、「どうかお聞きかせください」と、いった。

隠士はいった。

「それ大鈞（たいきん）は陶甄（とうけん）して彼此（ひし）異なることなし、洪鑪（こうろ）は鎔鑄（ようしゅ）して憎愛の執（しゅう）を離す。わかるかな、こういうことだ。天地創生の巨大なロクロは粘土をこね上げてあれとこれとの差異をなくし、天地創生の巨大な溶鉱炉は万物を溶かして憎愛の執着を離したのだ。独り、かの赤松子（せきしゅうし）や王子喬（おうしきょう）の寿命だけを長くして、孔子の師の項橐（こうたく）や弟子の顔回の寿命のみを短くしたのではない。ただ、本来の寿命を保つことが出来たか出来なかったかの違いだけである。養生の方法や延命の方術は極めて多く、くわしく述べることはできない。そこで、少しばかり大筋を摘（つ）み取ってなおその僅かな部分を教示するこ

とにする。

むかし秦（しん）の始皇帝や漢の武帝も心では仙人（せん・にん。不老不死の人）になることを願っていたが、生活に関しては世間と同じで、鐘鼓（しょうこ。かねとたいこ）や金石の音楽によって耳はすでに聴力を奪われ、錦の刺繍（し・しゅう）やきらびやかな衣服によって目は早くも視力を損（そこ）なわれ、紅い臉（まぶた）や朱い唇の女をしばしも離すことができず、生魚や生肉は片時の食事にも退けなかった。加えて、残忍な曲芸をさせては屍（しかばね）を見物し、妊婦の腹を割いては血を川のように流していたのである。したがって、このような輩には話しても難解なので、点滴のようにたらし、尾閥（びりよ。海底に開いているといわれる穴）のように少しずつ漏らすことにする。

よいかな、心と行ないが違うということは、労力を無駄にするだけで徒（いたづら）に疲れるばかりである。これは方形の底に円形の蓋を被（かぶ）せてきちんと合うことを願い、氷を錐（きり）もみして火を熾（おこ）すことを求めるようなものである。どうしてそんなに愚かなのか。

しかし、俗悪な世間はいうのである。

『皇帝のような貴人が得られなかった術である。ましてわれわれ凡人が得られるわけがない』と。

こういつて仙術を嘘いつわりとし、これを怪異と呼ぶ。どうしてそんなに迷うのか。

魏の武帝の臣下であった欒太（らん・たい）や始皇・漢帝の輩（やから）は道術の世界では糟（かす）の粕（かす）である。修行もせずにただ単に仙術を好む石ころであり、屑である。わしがこのような徒輩をはなだ憎むわけがわかるだろう。だから、伝授するのに人を選ぶのである。貴賤尊卑は全く関係ない。よろしいか、選ばれた以上は心を専一にして教えを受け、後になって悪口をいってはいけない。よく学ぶ人は先生を悪くいったりしないものだ。

さて、本題にはいるが、手足の及ぶところはたとえイナゴやアリといえども傷つけてはならない。体内のものはたとえ唾液や精液といえども吐写してはならない。体は俗塵を離れ、心は食欲を絶ち、目は遠くを見ることをやめ、耳は長くにわたって聞かず、口は荒々しいことばをやめ、舌は滋味を断ち、孝・信・仁・慈を本分とするのである。千金に蹴躓（け・つまづ）いてもゴミのように、天子の位を目（ま）の当たりにしても脱ぎ捨てた草履（ぞうり）のように、柳腰の美人を見ても化け物のように、爵位（しゃくゐ）をちらつかされても腐ったネズミのように捨て置いて顧みない。心静かにして無為、世俗を避けて俗事をへらす。こうして後、はじめて学ぶのである。

ここまで来れば、あとは手の平を指でさすようなもので容易である。ところが、俗人が最も好んで習いたがるのが、道教の僧侶や方士が最も禁じているものばかりなのだ。したがって、もしその禁じているものを捨てて通俗から離れることができれば、仙術は得難いものではない。

五穀は内臓を腐らせる毒であり、五辛は目を腐らせる毒である。酒は腸を断ち切る剣であり、豚魚（とんぎよ）は命を縮める戟（ほこ）である。美人美女は命を伐（き）る斧（おの）であり、歌や踊りは命を奪う鉞（まさかり）である。大笑いや大喜び、極度の怒りや極度の哀しみも損なうところが多い。

このように、一身の中にはすでに害をなすものが多いのである。この害を絶たずに長生きし、延命したとはまだ聞いたことがない。しかし、俗人が最も難しいのはこれから離れることである。これらを絶てば仙術を得ることなどはいたって易（やさ）しい。

必ず、先ずその害となる元凶を明らかにし、あとは仙薬を飲むだけである。

白朮（はくじゅつ）・黄精（こうせい）・松脂（しょうし。まつやに）・穀実（こくじつ）は体内の病を除き、蓬（よもぎ）の矢・葦（あし）の戟（ほこ）・神符（しんぷ。お守り）・呪禁（じゅきん。まじない）は外難を防ぐ。

呼吸は寒暖をうかがい、緩急は季節に従って調節する。鼻の孔を開いて口の中の唾液を飲み、胃袋を掘り返してそれを食らう。草芝・芡芝（そうし・じくし。キノコ類）は朝の飢えを慰め、茯苓・威儀（ぶくりよう・いき。樹脂類）は夕べの疲れに備える。こうして、日中に影を隠し、夜半に目がよくみえ、座ったままで地下を透視し、水の上をうまく歩き、鬼神を下僕とし、竜や天馬を乗り物とし、刀を呑み、火を呑み、風を起こし、雲を起こすのであるが、このような仙術がどうして出来ないことがあるか。どうして願いが満たされないことがあるか。

まだある。白金・黄金は天地が精製したものであり、神丹・練丹は薬の中でもよりすぐれたものである。服用するには方法があり、調合するには技術がある。深山に隠れて禊（みそぎ）をし、秘密裏にしなければならない。成功して一家を成すことができれば、一門は挙（こぞ）って昇天でき、わずか一銖（しゆ。0.67g）を服用しただけで真つ昼間に天の川に昇れるのである。その他、神符を呑んで生気を養う術、地を縮めて体を変化させる技など、勧めるにはあまりに多く、数え挙げることができない。

もし願いが叶って術を達成すれば、老人を青年に改め、白髪を黒髪にあらため、生命を延ばし、寿命をのばし、閻魔（えんま）台帳から死の予約を取り消し、生存期間は永遠となり、上は蒼々の天に跨って翔け巡り、下に日をみて遊べるのである。夢想を広げ、馬に

鞭（むち）して宇宙を駆け、車に油して銀河に戯れる。日の城に楽しみ、天帝の宮殿に遊ぶ。織女を機（はた）の側に眺め、昇天した恒娥（こうが）を月の中に求める。五帝の一人軒（けん）帝を訪ねて友とし、江東（こうとう）の仙人王喬（おうきょう）を捜して仲間とする。大鵬（おおとり）のねぐらを見、昇天した淮犬（わいけん）の跡を見つける。馬星の厩舎（きゅうしゃ）まで行き、牽牛（けんぎゅう）の港まで行く。心にまかせて仰向き腹ばい、思いのままに昇り降りする。淡泊にして欲なく、寂寞（せきばく）として声なし。天地ともども長く生き、日月とともに永遠に楽しむ。何と素晴らしいことであろうか。なんと広いことであろうか。崑崙山（こんろんさん）に住んでいるという東王父（とうおうふ）や西王母の話はどうして疑う必要があるか。これは、まさしくわれが聞き学んだ道家三宝の一つであり、靈宝君の秘術なのである。

世俗を顧みて思うに、貪欲に纏（まと）いつかれて心を苦しめ、愛欲につながれて身も心も焼き焦がしている。朝夕の食に惑い、夏冬の衣服に疲れ、浮雲のごとき富を願って泡のごとき財宝を集め、分不相応な福を求めて稲光のような命を養う。密かな楽しみも朝になれば天上の楽しみに嗤（わら）われ、小さな憂いは夕べになれば塗炭の苦しみに沈む。娛しみの曲がまだ終わらないうちに、悲しみの曲はすでに迫っている。今日は公卿でも、明日は下僕となる。初めは鼠の上の猫のごとくあるも、終わりは鷹の下の雀となる。草の上の露を頼みにして朝日が射すのを忘れ、枝先の葉を頼みにして風霜に遭うのを忘れている。ああ痛ましいことではないか。どうしてこれが、湖沼の葦に巢を作り、風のたびに壊されているヨシキリの愚かしさと異なるか。どうしていうに足りようか、まだいい足りないくらいだ。そもそもわが師の教えと汝（なんじ）が説く言説と、汝らの快樂とわれらの愉快と、どちらが優劣であるか、いずれが勝敗であるか」と。

ここに亀毛先生と蛭牙公と兎角公の三人はともに跪（ひざまづ）いて虚亡隱士を称（たた）えていった。

「わたしたちは幸運にもよい機会に巡り会えて、思いがけなくも善言を承り、間違ひなく知りました。干物屋がいたって臭いのと香水の壺が極めて香しいのと、犢麝（しゅうび）（人名）が醜男（ぶおとこ）であるのと子都（しと）が美男子であるのでは、石と金との隔たりがあり、臭みと香りとでは比べものになりません。今より以後は心を専らにして精神を鍛錬し、永くこのお言葉を味合わせていただきます」と。



三教指帰 巻の下 仮名乞児（かめいこつじ）の論

懷（おも）いを写（は）くの頌（しょう）詩

無常を觀るの賦

生死海の賦

三教を詠う詩（十韻の詩）

ku2.mht

仮名乞児という者がいた。どういう人であるかはよくわからない。草葺きの家に生まれて貧しさの中で育ち、俗世を捨てて仏の教えを仰ぎ、苦行していることだけは確かである。

黒髪を剃り落として頭は銅（あかがね）の瓶（かめ）のように艶々しているが、色艶はすべて失せて金属を溶かす埵塙（るつぼ）のようにかさかさしている。姿形（すがたかたち）は痩せこけて体は小さく、長い脚は骨張って池の端の鷺（さぎ）の脚のようであり、すくめた首は皮膚（ひふ）が輪をなして泥の中の亀の首に似ていた。

牛の飼い葉桶（みづが）と見紛（みまが）うつぎはぎの木鉢（みづが）をいつも左の肘（ひじ）にかけ、馬の手綱（たずな）かとおもわれる無患子（むくろじ）の数珠を右手にかけていた。

道祖神に備えている粗末な草履（ぞうり）をはいて官吏のはく牛革の履（くつ）は捨て、荷馬車に使う縄の帯をしめて役人がしめる犀角（さいかく）の鉤帯（こうたい）。バックル付きのベルト）は捨てた。茅（かや）で編んだゴザを下っているのを見れば、市場で物乞いをしている人たちでさえ頬を赤らめてうつむき恥じるだろう。繩床（じょうしょう）なわのこしかけ）を背中にしっかりとくり付けているのをみれば、獄舎につながれている盗人もあれでは盗めないと天を仰ぎ嘆くだろう。口の欠けた水筒を下っている肩は汚れ、油売りが油壺をさげた肩と異ならない。金輪のとれた錫杖（しゃくじょう）は薪（たきぎ）売りが売っている木材と変わらない。

鼻筋は折れ窪んで瞼（まぶた）は落ち込み、顎（あご）は尖（とが）って目は角張り、歪（ゆが）んだ口は髭（ひげ）がなく孔雀（くじゃく）貝に似て、欠けた唇は齒がまばらで兎の唇のようだった。

市場に入れば瓦礫（がれき）が雨のように飛んで、船着き場を過ぎるときは馬の糞尿

が霧のように降りかかって来る。

阿毘（あび）私度は常に離れがたい同志であり、光明優婆塞（うばそく。在家信者）は時に信仰心の厚い檀主である。

あるときは金巖（きんがん。自注Ⅱかねのたけ）に登り、雪に遭って果たせなかった。あるときは石鎚（いしづち）山を越え、食糧が尽きて行き悩んだ。あるときは黒髪（くろがみ）の美しい娘（自注Ⅱすみのえのうなこおみな）を見て心をゆるめ、思いを寄せた。あるときは澁倍（しぶへ）の尼と行き会い、心を鞭打ち厭（いと）い離れた。霜を払い青菜を食うのは、二十日に九日しか食わない生活をした子思（しし）。孔子の孫（こうしのそん）の生活とおなじであり、雪を掃き肘を枕にするのは仏の戒めよりも孔子の戒めに等しかった。

青空を天幕にすれば家に苦勞しなかった。白雲が岳にかかればこれを帷（とばり）とした。夏は胸元をゆるめて襟（えり）を開き、楚（そ）の襄（じょう）王に吹いたという涼風に向かい、冬は首を縮めて袂（たもと）をふさぎ、火の帝王燧（すい）帝が扱いを教えたという猛火を守った。橡（とち）の実際の飯やニガ菜の菜（さい）でさえ十日に一度しかありつけなかった。紙の着物や葛（かづら）の衣服は左右の肩を隠せなかった。ミソサザイは林に巣を作ってもわずか一枝に過ぎないという。米が半粒もあれば足りるとした。何曾（かそう。魏の宰相）の奢侈（しゃし）な美食を願わないのだから、たれが子方（しほう。孔子の孫弟子）の贈る皮衣（かわごろも）を愛そうか。清貧に甘んじた榮啓期（えいけいき）もかれに比べれば恥じるだろう。高祖の太子に仕えた無欲な四人の老人もかれに向きあえば仲間ではあるまい。身なりは笑わせているが、志はもはや奪われるものではなかった。

ある人が論（さと）していった。

「わたしは先生から聞いている。天地の靈長は人を第一とする、と。人の勝れた行いは孝であり忠である。その他の行ないは千差万別だが、この二つはその要（かなめ）である。ゆえに、父母が遺（のこ）してくれた体は損なわず、君国の危機を見ては命を捧げ、名をあげ、父母を名高くすることであって、一つたりとも廢（すた）れさせてはならないのである。また生涯の楽しみは富であり、貴である。百年の知己（ちき。親友）は妻子とは比べようもない。子路（しろ。孔子の弟子）は富貴になったのを悲しんだが、それはすでに父母が亡くなっていたからであり、曾子（そうし。孔子の弟子）も親に孝を尽くせなかったことを悔いたが、これは主（あるじ）に仕え忠を全（まっとう）したからである。今、そなたには親がおり、主君もいる。それなのにどうして養わないのか、どうして仕えないのか。いたずらに乞食の群れに身を沈め、空しく租税勞役を逃れる輩にまじって恥ずべき行ないをし、父母を辱しめ、汚名を後世に残すようなことをしている。これは間違いない

死刑が相当であり、君子の恥じるところである。にもかかわらず、そなたはそれをやっているのである。そのため、恥を知る親戚縁者はそなたに代わって地に隠れ、他人はそなたを見てあまりのひどさに目を覆い隠す始末である。早く心を入れ替えてすみやかに忠孝の道につくがよい」と。

乞児は慚（ぶ）然として尋ね返したものだ。

「何を忠孝と申されるか」と。

答えはいった。

「父母が家にいるときは表情を和らげてご機嫌を伺い、気配りをして力をつくし、夏は涼しく冬は暖かくしてやり、いやな顔することなく仕えることである。これがいうところの孝である。虞（ぐ）の舜帝や周の文王はこの孝を行なって帝位に昇り、董永（とう・えい）や伯喈（はく・かい）も至上の孝行で評判を世間に流したのである。次に忠である。『礼記』によると、四十ではじめて士官し、孝を忠に移して主君に命をささげるのである。たとえ主君の顔が厳しくあっても道理を立てて諫言するのである。そのためには天文に通じ、地理に詳しくなければならぬ。古（いにしえ）を考え、今になぞらえる。遠くの民を安らがせ、近くの民を良くする。天下を治め、主君を正し助ける。そうなれば、栄光は子々孫々に及び、名声は後世に伝えられる。このようなものを忠というのである。思うに、伊尹（い・いん）・周公・箕子（き・し）・比干（ひ・かん）がそのような人であろうか」と。

仮名は答えた。

「親を安らかにし、主君を正す。このような類を忠孝というのであれば、つつしんで仰せの旨（むね）は承った。申される通り、われは実に不肖ではあるが、しかしながら、それでもなお禽獸（きん・じゅう）とははなはだしく異なるのである。忠孝の心は一度として離れたことはなく、思いは五臓がただれ裂けるほど苛烈である。父母がかばい守り、懇切丁寧（こんせつ・ていねい）に育ててくれたのである。その情愛を顧みれば高きこと五岳（泰・衡・華・恒・嵩（こう）山）の山々に並び、その恩を思うと深きこと四水（黄河・長江・淮（い）・済水）の河川に過ぎる。骨に刻み肌に書きつけ、誰が忘れたりしようか。報いた気持ちには極まりなく、お返ししたい気持ちにはすこぶる厚い。それだから、孝子を戒めた『詩経』の南陔（なんが）を詠って恥を抱き、孝子が孝を尽くしきれない悲しみをうたった蓼莪（りくが）を歌って愁えているのである。林に鳴くカラスをみては食べ物を口移しにして恩返しをするという『反哺（はんぷ）の孝』を思つては終日心を焼き焦がす思いをし、先祖に供え物をするというカワウソを思つては終夜肝（きも）がただれる思いをし、常に嘆くことは、思いはあっても『莊子』の鮒魚（ふぎよ。ふな）が求めた斗升（としよ

う。少量）の水や、『史記』の季札（きざつ）が墓標にかけた信（まこと）の剣のように生前にはなしえないということである。老いた親は白髪となつてあの世に近づいているといふのに、われは愚かにも恩返しができない。日月は矢のように父母の短い命に迫っているのに、家の財産は乏（とぼ）しく家屋は破れ傾いてしまった。二人いた兄は重ねて逝き、思うと涙は流れてやまない。親戚縁者はともに貧しく、思い出せば涙は尽きない。慷慨（こうがい）の思いを起こして日を月につぎ、凄愴（せいそう）の痛みを興して朝より夕べにいたる。ああ悲しきかな。進んで仕えようとすれば濫吹（らんすい）の故事ではないが、無能を雇つてくれる斉の宣王のような主君はいない。退いて吹かないでいようとすれば、禄を待つ親がいる。進退きわまつて嘆き、生活に落ち着きをなくしているのである」と。

そこで、頌（しょう。詩）を作り、懷いを写（は）いていった。

#### 懷いを写くの頌

「力を出して田を耕すも かつてのような筋力はない

角（つの）を叩いて仕官願うも 寧戚（ねい・せき）ほどの才覚もない

才覚なくて在官すれば 無能のそしり避けて通れぬ

貪り食らい遊び暮らせば 無為徒食をばいましめられる

まして濫吹（らんすい）吹き真似などは もはや最もよくない行為

詩経たたえる文王・武王 礼・樂美風周（しゅう）にのみ聞く

孔子は聖者天が認める 諸国遊説休む暇なし

われははなはだ愚かで頑固 いずれの道に従うべきか

進むにしても才覚はなし 退（の）こうとすれば責めを覚える

進退間（はざま）いずれにつくか 思い浮かばず嘆息ばかり」

頌を作り終るとしばらく思いにふけり、今度は文書を作つていった。

「僕は聞いている。『小孝は力を用いて親に仕えることをいい、大孝は仁徳を施して天下に尽くすことをいうのである』と。呉の太伯（たい・はく）は周の大王の子で季歴の兄であったが、父の大王が季歴を後継ぎに考えているのを察して呉に走り、入れ墨をして髪を切り、季歴に王位を譲った。釈迦は前世にいたとき、飢えた虎の親子の餌食（えじき）になったがために、父母の大車王と麻耶（まや）夫人は痛み悲しみ、親戚は天に向かって叫び嘆いた。これを見るかぎり、太伯も釈迦も父母が遺（のこ）してくれた体を毀損（きそん）して親戚縁者を悲しませている。その意味で、どこにこの二人にまさる者がいるか。まさにあなたがおっしゃる通りの親不孝を犯しているのです。しかしながら、太伯は至徳の号を得、釈迦は大覺（だい・かく）の尊（みこと）と称えられているのである。そうであるから、仮にも孝道に適うのであれば、どうして狭く区切って論じられるのか。羅卜（ら・ぼく）は母を餓鬼道から救い、那舍（な・しゃ）は父を天上界に生き返らせている。むしろ、大孝であり高德というべきである。僕は愚かではありますが、正しい教えを汲み取り、古人の学徳を仰ぎ敬い、常に先ず国家のために功德を祈り、父母のために陰徳を譲り、この恵徳をすべて忠とし孝としています。そうであるのに、あなたは田を耕し親に従う孝だけをして、村の門を高くさせて子孫の出世を信じた于公（う・こう）や、墓の掃除をして息子の帰りを待った嚴母（げんぼ）のように、先を読むことができない。どうしてそんなにも劣るのか。しかし、この文書はまだ心のままを吐き出したものではないので、後日あきらかに述べさせていただきます」と。

このように固く自分の主義主張を守っているのだから、父兄を気になげず、親戚にも寄り付かず、浮き草のように諸国をめぐり歩き、根無し草のように異国を転々としていた。

ここに雲漢（うんかん）星たけて（天の川に星満ちて）、五臓六腑はすでに空っぽだった。

石窟の貯えもつき、腹の中に八万いるといわれる虫も飢えて息絶え絶えになっていた。

甑（こしき。むしがま）の中は塵が舞い、竈（かまど）の中は苔が生（む）していた。

乞児は思い考えた。仏典は食によってこの世に住（とど）まることを顕（あらわ）し、儒書は飢えるのは学問が未熟であるとする。ならば、八万の飢民（き・みん）を帯で背負い、早く実り豊かな里に身を寄せることに越したことはない、と。

そこで直ちに松林を発ち、集落のある都を目指したのである。

道中、老子の「足るを知る者は富む」を守り、鉢を捧げ真っ直ぐに行った。従う童子はすべていなくなり、ひとり経典を持っていた。

兎角の家に着いて門柱によりかかった。

ちょうど、亀毛と隠士が庭で論戦を繰り広げているところだった。

乞児は思った。

「稲光のように折り曲げた体を支えて諸生物の住む檻の中に宿り、夢幻のような意見を掲げて十八界といわれる感覚認識の世界に没入し、煩惱のよってくる空しい五官に幻の城を築いて元素からなる仮の体に泡のような軍隊を興し、クモの網を兜（かぶと）にして蚊のまつ毛に乗る小虫を鎧（よろい）にし、虱（しらみ）の皮を太鼓にして敵陣を驚かし、蚊の羽を旗にして旅団を標示し、我見の戟（ほこ）を杖に寡聞の剣をもてあそび、袂（たもと）をまくって霜柱のような肘を突き出し、魑魅魍魎（ちみもうりょう）が原に戦って私利私欲の話を競い、天下の弁舌を争っているようなものだ」と。

そこで、耳を傾けてしばらく聞き、目をしばたたかせて立ち止まったのである。

二人はわれこそが正しいといい、ともに相手を正しくないといっていた。

時に、乞児は自分で思った。

「溜り水の一滴やかがり火の火の粉のような小さなことで、この有様である。ましてわれはボサツではないか。どうして虎豹（こひよう）の鉞（まさかり）を持ってカマキリの斧を打ち砕かないのか、と。

遂に、知恵の刀を砥（と）いで弁舌の泉を湧かし、侮辱（ぶじょく）に耐えるヨロイを着て慈悲の馬に乗り、速くもなく遅くもなく亀毛の陣営に入り、驚かず恐れず隠士の軍団と向かい合い、陣を出て行きつ戻りつし、やがて敵陣に入って飛び跳ねる。

こうして、先ず、太祖の頭痛を忘れさせた孔璋（こうしょう）のような檄（げき）を飛ばし、敵將を矢文で自殺させた魯仲連（ろちゅうれん）や獄中から上書して賓客（ひんきやく）の待遇を受けた鄒陽（そうよう）のような文書を示す。これを見て総大將は恐れおののき、兵士は戦意を失って自ら後ろ手に縛り、首を突き出して降伏し、刀に血を塗る苦労はなくなる。しかし、反抗心は改め難く疑いの心を抱いているので、涙を流して首を撫（な）でてやり、憐れみを含んで諭（さと）している。

『そもそも、杯に泳ぐ小魚の鰭（ひれ）をつまみ揚げて数千里もある巨大な鯉（こん）を論じることが不可能であり、翼を庭の垣根に羽ばたかせるだけの鳥で九万里を飛ぶ大鳥を知ることはできない。海のほとりに住む頑固者は木が魚のように浮くのを疑い、山の上にすむ愚か者は魚が木のように浮くのを怪しむ。知るがよい。人は離朱（り・しゅ）のような視力がなければ百歩先の細毛を見ることはできないし、子野（しや）のような聴力がなければよく鐘の響きを聞き分けることはできない。ああ、知ると知らないのと、愚であると思でないのと、何とその隔たりのあることか。われは汝らの論説を聞いた。まるで氷に彫つたり水に書いたりしているようなもので、労あつて益なしである。どうしてそんなに劣るのか。亀毛の意見は鴨の脚はこれ以上短くすべきでないとするものであり、隠士の意見は鶴の足は長くしてもまだ足りないとするものである。汝らはまだ菩薩の教えや仏の道を聞いたことはないようであるから、われが汝らのためにほぼその綱目（こうもく。大要と細目）をのべる。是非とも始皇帝が虚実を見抜いた鑑（かがみ）に照らし、竜を好んで描いた葉公（ようこう）が実の竜を見て逃げ出したような真実を恐れる迷いを早く改め、互いが群盲象を撫（な）づのような酔いを醒ましてともに仏の教えを学ぶがよい。仏の弟子の儒童（じゅどう）と迦葉（かしょう）はいずれもわれの仲間である。汝らの無知蒙昧を哀れんでわが師が遙かむかしに派遣したが、人類の能力が劣っていたため浅くこの天地の表皮を示しただけで三千大千世界の真理については語らなかった。だから、貴殿らは教理の異なる道を選んで旗を掲げ鼓を鳴らして争うのである。どうして迷わないことがあるうか』と。

虚妄隠士は応えていうであろう。

『つくづく貴公を見てみると、やはり世間の人とは違うようだ。頭を見ても毛は一本もない。体をみれば多くの物を持つておる。一体、貴公はどここの国の何郡で誰の子で誰が戸主ぞ』と。

仮名は大笑いしている。

『欲界・色界・無色界の三界といわれるこの世には家はないのである。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上界の六道は輪廻して定まらないのである。あるときは天上を国とし、あるときは地獄を家とする。あるときは妻になったり子になったり、父になったり母になったりする。あるときは悪魔波旬（あくまはじゅん）を師とし、あるときは外道邪教を友とする。餓鬼や禽獣はみなこれわれであり汝である。今より始めに至るまでいまだかつて終わりも始まりもないのである。今よりはじめに至るまでどうして数に限りがあるうか。環のようにいろいろな生き物に生まれかわり、輪のように六道を流転してやまないのである。汝の髪が雪のようであつても必ずしも兄とはならず、われの鬢（びん）が雲のようであつてもまた弟ではないのである。汝とわれとは始まりのないところから来て生き変わり死に

変わり、つねに生滅変化して移りかわっているのである。どうして定まった国があり、郡があり、親があるうか。しかしながら、最近、ほんの束の間ではあるが、人の住む日の出るところ、輪転王が教化するほとり、玉藻（たまも。藻の美称）が集まる島（自注「讃岐」、楠木が日を隠す浦（自注「多度」）に住み、いまだに思うところに就職しないまま早くも二十四年を経てしまったのである』と。

隠士は大変驚いて聞く。

『それでは何を地獄といい、何を天国というのか、またまたなんのために煩わしくそのように多くの物を持ち歩いているのか』と。

仮名はいう。

『行ないが悪ければ地獄の牛頭（ごず）や馬頭（めず）といった鬼が自然と出てきて辛苦を与え、心がけが善ければ天上界の金闕や銀闕といった楼閣（ろうかく）がたちまち翔け集まって甘露の慈雨である仏の教えを授けるのである。むずかしいのは心を改めることだけであって、定まった天国や地獄があるわけではない。われも前世では汝のように迷い疑っていたものだ。それがつい先だつてのことだが、たまたまい師の教えに出会ってすっかり前世の酔いを醒まされたのである。そのわが師釈尊であるが、衆生を救済しようとする願いは菩薩の中で最も深く、八十の仮の姿をこの世に現し、慈悲は量り難く、三十の教化を示されたのである。時に、釈尊は前世で縁のあった衆生は水の神である竜神をさえ差別することなく甘露の慈雨をめぐみ、枯れしぼんだ枝を栄えさせて悟達できることを約束されたのであるが、縁のなかった輩（やから）は貴賤を問わず辛味も臭味も知らないまま常に蓼（たで）や廁（かわや）の中に沈み、醍醐（だいご。乳製品。仏のまことの教え）を忘れてしまっていたのである。このため、釈尊は生涯を閉じる日に、心をこめて後継者の弥勒や老臣の文殊（もんじゅ）らに後事をたくし、王の印璽（いんじ）を弥勒（みろく）に授け、無縁の輩を救済するよう近臣に教えたので、大臣の文殊と迦葉（かしょう）らはその教えを檄（げき。ふれぶみ）にして諸国に配り、弥勒の即位を諸々の衆生に告げたのである。このため、われもただちに檄をうけたまわって馬に秣（まぐさ）をやり、車に油をさし、旅支度をして道をきめ、昼夜をいとわず弥勒のいる都へ向かったのである。ところが、道中は困難が多く、人家は見渡すかぎり絶え、街道ははなはだにぎやかで脇に入る道がわからず、一・二の従者は泥の中に溺れて抜け出すのにまだに機会がなく、あるいは馬を駆け車を走らせて先に出発してしまい、そういうわけで小物を捨てずに一人で担ぎ、食糧が絶えて路に迷い、恐れ多くも門の側に進んで旅路の金銭を乞うのである』と。



「ここで、懷（おも）いを述べるのに心をむち打ち励まし、「無常（むじょう。この世）の賦」を作り、「受報（じゅほう。報いを受ける）の詞」をつくり、鈴々（れいれい）と鳴る錫杖（しゃくじょう）を振り、喈々（かいかい）と響く声を放ち、亀毛らに唱えたのである。

### 無常の賦

「よくよく尋ねてみるに、高く聳える妙高山は独り抜きん出て銀河侵すも、世界を終わらす劫火（ごうか）ひとたび起れば焼かれて灰燼に帰す。果てしなく広い大海原も限りなく深く大空を凌いでいるが、灼熱数日さらせば乾いて消滅し、広大なる大地も漂い流れて砕け裂け、広弓（こうきゅう）なる天空も焼け焦がれて砕け折れる。そうなれば、寂寥（せきりょう）たる天外宇宙の寿命も電光より短く、勝手気ままな神仙の寿命も落雷の閃光と同じである。ましてやわれらが授かった肉体は金剛石ではない。姿形は瓦礫に等しく、心身は虚妄であり、水に映った月である。肉体はこの世にとどまり難く、陽炎（かげろう）よりもはかない。

『十二因縁（無明・行、識・名色・六処・触・受、愛・取・有、生・老死）』は輪廻して誘い励まし、『八苦（生・老・病・死の苦・愛別離の苦・怨憎会（おんぞうえ）の苦・求不得（ぐふとく）の苦・五陰盛（ごおんじょう）の苦）』は常に心の源を悩ます。『三毒（貪（とん）・瞋（しん）・痴（ち））』の苦悩は昼夜常に燃え盛り、『百八煩惱』は年中茂る。塵に漂うもろい体も命のつきた朝（あした）には春の花とともに乱れ散り、風に飛び交う仮の命もこの世を離れた夕べには秋の木の葉とともに乱れ散る。千金の玉肌も淘汰（とうた）の先に地下に沈み 天子の尊貴な姿もわずかな煙とともに大空に至る。見目（みめ）うるわしき巫山（ふざん）の美女も霞（かすみ）を追って雲の上に消え、真珠のような齒も露を連れそってことごとく抜け落ちる。傾城の美女の眼もたちまち緑の苔（こけ）を浮かべる沢となり、玉飾りをつけた美女の耳もたちまち松風の吹き抜ける谷となる。朱を施した紅の臉もついには青蠅に踏み散らかされ、丹色（にいろ）に染めた赤い唇も褪（あ）せて烏鳥（うちょう）にしばまれる。百の媚（こ）びや巧みな笑いも骨の中に古び曝され、更に値打ちをなくす。千の媚（こび）や美しい媚態（びたい）も体の中に腐れ爛（ただ）れ、誰があえて興味を持つか。高々と結い上げた髪も縦横に乱れて沢のほとりの芥（あくた）となり、細々とした白い手も沈みしずんで草の中の腐物となる。ふんふんと匂う蘭（らん）の香りは八方の風に従って飛び去り、ちよろちよると流れ出る臭い液汁が九つの穴に従って流れ出る。まといつく妻子も宋玉（そうぎよく。屈原（くつげん）の弟子）が夢で遭った神女と異ならず、積み重ねた宝玉も鄭交（ていこう。列仙伝の仙人）が仙女にもらった玉と同じくたちまちにして消えるのである。さわさわと松風が物寂しく襟に吹いてもそれ

を聞いて楽しむ耳はどこにあるか。煌煌（こうこう）と満月が美しく顔面に映えてもそれを見て楽しむ心はどこに宿るか。これで知るだろう。颯爽（さつそう）とした絹の衣をどうして愛し喜べようか。蔦（つた）かずらの破れ衣を常にまとうだけである。赤土を塗った家や白壁の家は長く住むところではない。松を植えた塚やヒサギを植えた墳墓こそが長く宿る里である。妻子を思っても塚の下では会うこともできない。親友を懐かしんでも墳墓の下では談笑するすべもない。ひとり松の陰に伏して空しく樹木のほとりに滅び、独り鳥の囀（さえず）りを友にしていた草の前に沈むだけである。あらゆる虫がうごめいて相つらなり、あらゆる獣（けだもの）が牙を剥いて群れ集（たか）る。妻子は鼻を塞いで厭い逃げ、親戚遠近も顔をおおって逃げ帰る。ああ、痛ましいことだ。あり余る滋味を食って肥え太った体も、ただただ犬鳥の糞尿となり、ありとあらゆる衣装を装って人目を引いた肢体も、空しく薪に燃やされて灰となる。誰が春の苑に遊んで愁いを消し、秋の池に戯れて宴にくつろげようか。ああ、哀れなるかな。亡き妻を悼んだ潘安（はんあん）の詩を詠んではいよいよ哀しみを増し、焼け死んだ伯姫（はくき）の樂府（がふ）を詠っては保母の自責の痛みを激しくする。無常の暴風は儒生と仙人とを問わず、心を奪う猛鬼は富貴と貧賤とをいとわず襲いかかる。財宝を積み重ねても買うことはできない。権勢をもつてしても止まることはできない。寿命を延ばす神薬を千両飲んでも、魂を呼び返す薬草を百石ことごとく燻（いぶ）しつくしても、片時としてこの世に留まることはできないのである。誰が黄泉（よみ）の国から脱け出せようか」

#### 受報の詞

「死骸は草の中に朽ち爛れて体でなくなり、心は湧き立つ釜に煮られて気ままにできない。あるときは鋭く尖った刀の山に投げ捨てられ、流れでる血はとめどもない。あるときは高い山の鋒（ほこ）に穴をあけられ、胸を貫（つらぬ）かれて愁い悲しむ。あるいは一万石の石を乗せた熱車輪に轢（ひ）かれ、あるいは限りなく深い寒川に落とされる。あるいは釜の湯を腹に入れられてつねに炙（あぶ）り焼く仕事につき、あるいは鉄火を喉に流されてしばしも逃れることはできない。米の飯など、億光年どうして名を聞けようか。わずかな食事さえ万年も好きに食えないのである。獅子（しし）や虎豹（こひょう）は牙をむいて喜び躍り、馬頭（めず）や牛頭（こず）らは目を見張って脅（おびや）かす。助けを毎朝天空に叫んでみても許しは日が暮れるたびに忘れられている。閻魔（えんま）大王に頼み込んでも憐れみの心はない。妻子を招き寄せてもすでにどうにもならない。財宝で贖（あ）がな）うにも一つの宝玉もない。逃げようとすれば城壁は高く越えることはできない。ああ、苦しいことだ。ああ、痛ましいことだ。孟嘗君（もうしようくん）の客人ではないが、たれが鶏の鳴き真似をする客人を探してきて関門を開けたり、犬のようなこそ泥を連れてきて極刑から助け出したりするか。もはや脱出の考えは窮して途は尽き、千回悔いて千回

嘆くしかない。巨大な雲母（うんも。きらら）の岩を一片一片はがしていくほどの時間、巨大な城に満たされた芥子（けし）の実を一粒一粒減らしていくほどの限らない時間を思えば、もはや絶望号泣は増すばかりである。ああ、痛ましきかな。われがもし在りし日に仏道に励んでいなければ、思うに、地獄の一苦一辛の網にかかつて万の嘆き万の痛みに遭うも、更にたれが人に頼れるか。これに励めよ、これに励めよ」

亀毛らは聞いて、百石の梅酢が鼻に入ったかのように痛み悲しみ、数斗の二ガ菜が喉に入ったかのように肝（きも）をただらせ、火を呑んでもいないのに腹が焼け焦げるかのように、刀に穴をあけられてもないのに胸が裂かれるかのようにむせび泣き、涙を流し、跳ね上がり、地に倒れ、裂き殺されるかのような声をあげ、天に訴えたのである。

それはあたかも肉親をなくしたときのようにであり、愛妻をなくしたときのようにであり、一度は恐れを懷いて魂を失い、一度は悲しみもだえて気を失ったのである。

仮名は瓶（かめ）を手にして水に呪（まじな）いをかけ、残さず彼らの顔に注いだ。すると間もなく息を吹き返したが、二日酔いのように物を言わなかった。ちようど、千日酒を飲んで千日目に目を醒した劉玄石（りゅうげんせき）のようであり、父の喪に服して三年間口を利かなかった高宗のようだった。

しばらくして、かれらは二つの目に涙を流し、五体を地に投げ出して額を地に着け、繰り返し礼をしていった。

「わたしらは長い間瓦礫（がれき）を弄（もてあそ）んで常に微小な遊びに耽（ふけ）り、蓼（たで）の葉や廁（かわや）の糞尿になれ親しんで辛味臭味をすっかり忘れていました。盲目でありますのに目隠しをして険しい道に進み、びつこの馬を鞭打って暗い道を行っているように、どこに行き着くのか、どこに落ち着くのかまったく知らないでいました。今、たまたまご高説の愛情溢れる教えに与（あずか）り、おのれらの道が浅はかであったことを知りました。これからは、臍（へそ）を食らって昨日までの悪を悔いあらため、粉骨碎身して力の限り明日の善を行います。どうか慈悲の大和上（だいわじょう）よ、重ねてご指導を加え、詳しく仏の道をお示し下さるようお願いいたします」と。

「そうであろう。ああいいことだ、いいことだ。あなたたちは遠からず浄土に還れる」

仮名はいつて、続けた。

「今から生死の苦しみの寄って来る源を述べ、煩惱を断ったあとの楽しみがいかなるもの

であるか、悟りを得たあとの楽園をお示ししましょう。これは周公も孔子も語っていないものであり、老子も莊子も述べていないものである。

その楽園は自利の阿羅漢（あらかん）や縁覚（えんかく）は行けないところで、ただ弥勒や菩薩だけがのんびり遊べるところである。正しく聞いてよく記憶されるがよい。要点を挙げ、大筋をかいつまんで粗方（あらかた）を汝らに話す。よいかな」

「はい」

亀毛らは筵（むしろ）を退け、地べたに伏していった。

「心を静めて耳を傾け、謹んでひたすらお説を仰がさせていただきます」と。

そこで、仮名は心の鍵を開き、流暢（りゅう・ちよう）な弁舌を振るって「生死海の賦」を述べ、あわせて「大菩薩（だいぼだい。悟り）の結果」を示していった。

## 生死海の賦

「そもそも、生死を海とするのは、欲・色・無色の三界（さん・がい。この世）の果てを纏（まと）い、見渡すかぎり際限がないからであり、東・西・南・北の四天（してん）の表を連れ、遠くにかすんで測ることができないからである。万物を吹き出して巨億のものを総括し、大きな腹を空腹にさせて多くの河や川を呑み、大きな口を開けて諸々の掘りや運河を吸う。丘に登る波は恐々（きよう・きよう）と騒いで止まず、岬を越える浪は殷々（いん・いん）と盛んに相迫る。雷の響きは日々多く、雷の轟きは夜な夜な満ちる。万物重なり積もり、種類は多く集まる。いずれかの怪異が育たないか、いずれかの虚妄が豊かにならないか。

魚類は惜しみ貪り、怒り、極愚、強欲である。長大な頭は端々（はし・はし）がなく、遠大な尻尾は極まらない。鰭（ひれ）を挙げて尾を撃ち、口を張って食を求める。波を吸うときは欲を離れようとする船の帆柱を打ち砕き、帆を飲み込む。霧を吐くときは慈悲の大船の櫂（かい）を折り、人を食う。そしてまた泳ぎ、また潜る。志は常に定まらない。あるときは貪り、食らい、本性は正しくない。空堀のように、溪谷のように、その腹たるやいくらでも入る。後の害は考えず、鼠のように蚕（かいこ）のように食らう。同情もない、憐れみもない。むしろ、地獄に落ちることも忘れ、生涯の貴福だけをねがっている。

鳥類はへつらう、そしる、悪口、多言、喧騒（けん・そう）、驕慢（きよう・まん）、不正で

ある。翼を整えて道に叛き、高所に飛んで楽しむ。無常・苦・無我・不浄を常・楽・我・浄と逆さまに解釈した四転倒の浦をがつと大声で飛び、十悪の沢に羽ばたく。正直の菱の実をついばみ、廉潔（れん・けつ）の豆の葉を食う。そしてまた飛んでまた鳴く。目先の利欲だけで家庭を営む。あるいは生れ、あるいは死に、やがて来るであろう地獄の辛苦を忘れてしまっている。どうして知ろう、雁（がん）門の坂にかすみ網が張られていることとや昆明（こん・めい）の池に鳥もちのついた網が設けられていることを。そして弓の名人更羸（べん・えい）の矢が前から飛んできて首を砕き、養由（よう・ゆう）の弓が尻に放たれて血を流すことを。

その他雑色（ざつ・しよく）類は驕慢（きよう・まん）で怒り憤り、ののしり、ねたみ、うぬぼれ、そしり、道楽、気まま、無慙（む・ざん）。面目なく思わない）、無愧（む・き）。恥じない）、信じない、憐れまない、邪淫（じゃ・いん）、邪見、憎愛、榮辱（えい・じよく）、殺害を日常とする党（ともがら）であり、格闘を茶飯とする族（やから）である。形はおなじでも心は異なり、類（るい）を別にし、目（もく）を異にする。鋸（のこ）の爪、鑿（のみ）の歯を持つ者は慈しみが少なく、穀物を食う。狙いをつけ虎のように見つめて朝露の麓（ふもと）に遊び、目を見張り獅子のように吼えて夜夢（や・ぼう。真夜中）の谷に戯れる。遭遇したものは気を奪われ精を抜かれ、脳天を割られ腸を砕かれる。見るものは身を慄（おのの）かせ心をすくめ、目くらみを起こし恐れ伏す。

これら多くの類（たぐい）は上は有頂天にからまり、下は無間地獄にこもって角つきあわせ、櫛（くし）の目のように隙間なく並び、浦ごとに家屋を連ね、名文家の木玄虚（もく・げんきよ）の筆を千本集めても述べることはむずかしく、郭象（かく・しょう）のすぐれた弁舌を万言集めても論ずることはできない。このため、不殺生・不偷盗（ふ・ちゆうとう）・不邪淫・不妄語・不飲酒の五戒を乗せた小舟は猛々しい波に漂って地獄の鬼の港をさまよっているのであり、不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不両舌（ふ・りょうぜつ。二枚舌を使わない）・不悪口（ふ・あくぐち）・不綺語（ふ・きご）・不貪欲（ふ・とんよく）・不瞋恚（ふ・しんい）・不邪見の十善を載せた車は悪魔に引かれて鬼神の隣をごろごろと音たてて巡っているのである。

そういうわけであるから、悟りの心をタベに発（おこ）し、最上の報いである大菩提の結果を朝（あした）に仰ぎもとめなければ、誰がびようびようとして果てしない海底を抜け出し、とうとうとして広大な法身（ほつしん。一如。真理）に昇ることができようか。

まこと、しなければならぬことは六波羅蜜（ろく・はらみつ。六つのボサツ行）である。これをイカダに積み、とも綱を解いて河に漂い、八正（はっ・しょう）の徳目を大船に載せ、船出の用意をして波をいとおしみ、精進の旗竿をたてて瞑想修行の帆を挙げることである。群がる賊は忍辱（にん・にく）の鎧（よろい）で防ぎ、多くの敵は知恵の剣で脅す。修行に

は七覺（しちかく）の馬を鞭打ち、沈んでいた深みの泥沼を早く抜け出て、四念（しねん）の車に乗り、高く俗塵を越えれば、本懷（ほんかい。本望）を得て頭上に珠玉を許され、成仏して国土を与えられることは『法華経』譬喩品（ひゆぼん）にある鷲子（しゅうし）が成仏を予言された春と同じであり、首飾りを授かって領土を封ぜられることは提婆品（だいばぼん）の竜女が男子に變じて仏果（ぶつ・か。さとり）を成した秋と比べられるのである。十地といったボサツ修行の長い道のりも瞬時に過ぎ、三祇（さんぎ）といった遠い時間にも悟りを究めるに難しくはない。こうしてのち、一地（いちじ）一地十重禁戒の戒めを守り乗り越え、菩薩位に至ったことを真如（しんによ）に証し、涅槃（ねはん。さとり。成仏）の殿堂に登り、王号を仏国土に称するのである。

一如（いちによ。真如）は道理に適つて心に分け隔てがない。知恵を含んで毀譽褒貶（きよほうへん）を遥かに離れており、生滅を超えて変わらず、増減を越えて衰えず、億万劫年にわたつて円寂涅槃（えんじやくねはん。悟りの世界）であり、三世（さんぜ。過去現在未来）にわたつて無為自然なのである。どうしてこれが遠大でないことがあるのか、広大でないことがあるのか。

悟りを開けば、黄帝や堯（ぎょう）帝・伏羲（ふつ・き）の草履（ぞうり）取りになることもない。転輪王や帝釈・梵天の車引きになることもない。悪魔や外道（げどう。邪教）が百の非を馳せて非とすることもない。声聞や縁覺が万の是を飛ばして是とすることもない。

しかしながら、仏・菩薩らの四弘誓願（しぐぜいがん。衆生救済・煩惱断滅・仏法学究・無上開悟）はいまだに達成されず、すべての衆生は泥中に沈んでいた。法身はこれを顧みて悲しみ、これを思つて念を入れ、更に百億に姿を変えて百億の城に分かれ、仏に仮託して姿を現したのである。

この世の成道（じょうどう。成仏）は釈迦の八相（はつ・そう。天下・入胎・出胎・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃）に始まるのである。光り輝く仏となられた釈迦は苦・集・滅・道の四諦（し・たい）の座に坐り、神の光の使いを八荒（はつ・こう。八方）に走らせ、慈悲の轍を十方（じつ・ぼう。すべてのところ）に配られたのである。

こうして後、ありとある衆生が雲に乗って雲のように行き、ありとある仲間が風に乗って風のようにやって来るのを待ったのである。

天より地より、雨のように泉のように、淨（じょう）より穢（え）より、雲のように煙のように、地を下に天を上、天を上、地に下、八部四衆組（くみ）になり、それぞれ交わり連なつて、仏の徳をせきせきとたたえ、鼓をえんえんと打ち鳴らし、鐘をがいがい

と振り鳴らし、花のようにひるがえり、りんりんらんらん、しんしんてんてん、目に溢れ、耳に満ち、地に溢れ、天に満ち、踵（くびす）をふみ、跟（かかと）をふみ、肘を張り、肩を反らし、礼を尽くし、敬いを尽くし、心をつつしみ、心を一にしたのである。

だから、仏は一音の法輪を転がして衆生の邪心邪見を碎き、三千大千世界を引き抜いて外界に投げ捨て、須弥山（すみせん。妙高山）を削らずに芥子粒に入れ、慈雨を降らして誘い戒め、法を分けて喜び食し、知恵をかくして戒律をしまい、ことごとくが天下の太平をうたい鼓腹撃壤（こふくげきじょう）し、みんなが來蘇（らいそ。りっぱな王の軍隊が救いに来て人民よみがえった故事）をたたえ帝王の功績を忘れるのである。

無量国土があつまる湊（みなと）は、世間衆生が仰ぐ叢（くさむら）である。思うに、尊であり、長であり、都であり、宗である。ああ、なんと広くゆつたりしていることか、仏の雄（おき）は高大であり、この偉大さを誰があえて語りつくせようか。

これはまこと、わが師釈尊が遺（のこ）した教えであり、真理の小さな水溜りにすぎないが、あの、隠士が申した神仙の小さな術などは俗塵に吹く微風であり、どうして語るに足りようか、どうして尊ぶに足りようか」と。

亀毛らは恐れたり恥じたり、哀しんだり笑ったり、乞児の弁舌にまかせ、伏したり仰いだり、声が四角になれば四角になり、丸くなれば丸くなり、歓喜踊躍、終わると称えていった。

「わたくしどもは幸いにも三千年に一度咲くという優曇華（うどんげ）のような大阿闍梨（だいあじり。高僧）にお会いして尊い出世間のすぐれた教訓に浴することができました。たれもが昔にも聞いたことがないのです、どうして後の世に聞くことがありますようか。わたしがもし、不幸にして和上（わじょう）にお会いしていなければ、永く現世の欲に沈み、必ず三途の河に溺れていたに違いありません。今、わずかとはいえ教えをこうむり、心身が安らいで朗らかになりました。たとえていえば、春雷が鳴り響いて土の中の虫がはい出し、朝日が昇って寒中の氷が溶け出すと申したらよろしいでしょうか。これに比べますと、周公も孔子もまた老子も莊子の教えも何とまあ偏狭（へんきやう）で浅はかです。ありますことか。今より以後は、己の身の皮を剥（は）いで紙とし、骨を砕いて筆とし、血を抜き取って墨に代え、髑（どくろ）を曝して硯（すずり）に用い、つつしんで大和上の慈愛あふれる教えを書きつけ、生れ生れ行く船と車に備えさせていただきます」と。

「それでは席に戻られよ」

仮名はいった。

「今まさに、儒・道・仏三教を明かにして、十韻の詩を汝らの俗謡に換える」と。  
そこで詩を作っていった。

#### 十韻の詩

「日月光輝闇夜を破り 三教痴心（ち・しん。まよい）絡（から）げあらわす

欲の類（たぐい）の数々あらば 医者（い）は治すに鍼藥（しん・やく）換える

三綱五常孔子の教え 学び学んで朝廷につく

無為変転は老子が授け 頼り頼って道観（どう・かん。道教寺院）に臨む

仏陀の教え一乗の法 教義は最上奥なお深し

自他の救済ともども兼ねて たれか忘れん魚・鳥・獣（けもの）

春花（はる・はな）落ちる枝木の下に 秋露（あき・つゆ）沈む葉末の先に

水は流れて止まり知らず 疾風（はやて）は去って音やいくばく

六塵（ろく・じん。色・声・香・味・触・法）の世は溺れる海ぞ いざ帰らんか四徳（し・  
とく。仏教で常・楽・我・浄）の嶺に

すでに知らずやこの世の縛（ばく）を なぜに纓簪（えい・しん。官職）捨て去らないか」